

第39号
Vol.13-3
2017年1月1日

Dari Kuching

アジア地域福祉と交流の会 (Asia Community Service & Exchange) 広報紙

〒859-1215 長崎県雲仙市瑞穂町古部甲1572番地 社会福祉法人南高愛隣会内

TEL: 0957-77-3600 FAX: 0957-77-3966 HP: <http://ace-jps.com/>

現地事務所: 204, 2nd floor, Methodist Apartment, No. 17, Hose Lane, 96000 Sibul, Sarawak, MALAYSIA.

発行人: 田島 光浩 編集人: 中澤 和代 Tel.Fax: +60-84-31-0757 E-mail: info@ace-jps.com ; gkenkn@gmail.com



笑顔がはじけるMuhhibahの仲間たち

撮影者 中澤 和代

皆様、冷たい空気の新鮮さを味わいながら、お元気で2017年を迎えられたことと思います。今年には私にとりまして、人生に何度もない節目の年となりますし、ACEの広報紙である“Dari Kuching”は、今号を以て最終号と致します。“Dari Pirang”時代から数えると63号になります。発行期間 だけで23年間、読者の皆さん、長きに亘りまして有り難うございました。

ベナン州とサラワク州（ボルネオ島）と合わせて24年間のマレーシア生活でした。ACEの会員になって下さった皆さんの会費によって私なりに描いていた福祉活動を続けることが出来ました。そして、未来に続く日々を、地元の人たちの手でという思いで、今年帰国します。現地活動は続きます。まだ会員でない方も、仲間になっていたいただけたら嬉しいです。

テーマはやはり「平和」です。命を守る福祉実践は、直線的に平和に結びつくと、今、確信を持っています。いずれ戦争体験のない人ばかりの世の中になるのは、素晴らしいことです。国が武器で殺し合う悲惨さでなく、皆で小さい「いのち」を守る大事さを確認し合える時代を創りましょう。ひとりでも多くの仲間を、これからもずっと待っています。(健)



ヘナンACSのこれまでとこれから

Khor Ai-Na

(ペナン 在住)

(翻訳・内海 明美)



ACSを担うAi-Naさん

今から20年前、Asia Community Service (ACS)をマレーシアのペナンで設立し、以来、ACSは利用者のニーズと共に変化してきました。この歩みは、私たちに様々な挑戦と機会を与え、また困難をも乗り越えさせてくれました。ACSのサービスを利用することで、多くの障害児者とその家族が救われてきたと思いますが、最終的には、私自身がこの歩みを通して、たくさんのお話を学んだと思います。

1993年、東京で研修中の私は中澤健先生に出会いました。このことは、Asia Community Serviceの始まりに通じることになり、私にとっては、この出会いが神様のご計画の中にあつたと考えています。

1997年、マレーシア北部地域に5名の障害児とともに早期療育の場(First Step)を開設しました。現在、ACSは、ペナン州で2カ所の早期療育センターを運営し、様々な障害をもつ乳幼児、就学前児童、その家族にサービスを提供しています。また、ACSは、全国組織である早期療育協議会の設立関係者でもあり、政府の政策関係者との関わりにおいても障害児者のニーズを理解してもらう働きかけを行っています。

2000年にスタートした作業所(Stepping Stone)は、実に大きく実を結びました。当初、建設計画の申請待ち、建設費用、作業内容な

どの準備に大変な時間と労力を要しました。現在は、この作業所がたくさんの人たちの道しるべの役割をも担っています。生産された製品は、スペシャル・ハンドの商品名で各地に販売され、質の良さにおいても顧客の方々に認められるところとなり、最近では、州都ジョージ・タウンの一等地に製品販売の場所をいただきました。

作業所のメンバー(利用者)自ら「ムティアラ・ボイス・クラブ(本人活動)」をスタートさせました。本人活動以外にも、アートの世界に参加することで、彼らの生活が少しずつ変化してきています。地域で自立生活を始めた人、友だちや好きな人もでき、その関係もだんだん、進化しています。

振り返ると、中澤先生と私の意見が対立する場合もありました。当時は先生の教えがわからず、文化の違い、男女の考えの違い、世代間の違いと考えようとしていましたが、この対立を通し、私自身は学ぶことができたのです。故に中澤健は私の師として位置付けております。ACS Penangは、初期にあつては、ニーズに沿ってサービスを組み立てましたが、同時にこれはマレーシア全国に通用する新しいモデルとなりました。

この間、ACSには、中澤健・和代夫妻とともに、その初期から変わることなく誠実にボランティアを続けているアメリカ人・Terri(テリー)がいます。多くのマレーシア人が、先進国に移住を希望しているにもかかわらず、彼らは、途上国に住むことを選択しました。快適な生活をかえりみない彼らの選択は、驚嘆するばかりです。その理由は、「神様の呼びかけに従っている」という風に私の中では整理されます。

テリーは、1984年からマレーシアで活動を始めましたが目立たず

ACSでの強い柱としての役割を担い続け、大きな力となっています。同様に、長年にわたって内海明美さんにも助けられました。そして、日本のNPO法人・ACEからの財政的、心理的支援は、貴重なパートナーシップです。このタイプの国際協力は、問題を抱えた背景をもつ私たちにはとても重要なのです。中澤先生の友人をはじめとする多くの日本人がマレーシアを訪問してくださって、私たちの活動にご協力をいただいていることに感謝しています。このような人々がいることで、ACSは今日まで歩んで来ることができました。

地域のボランティアや支援者たち、企業、NGOの仲間、政府関係者や学生たち、各職種の専門家たちとの交わりも私を豊かにしてくれています。中澤健・和代夫妻の控えめなリーダーシップ、将来へのビジョン、実生活が私たちに強い影響を与えました。彼は実践を通して、障害のある人もない人も人間として同じように尊ばれ、彼らのできることに焦点をおき、それを伸ばし、社会の一員として認められることを語り続けました。このことが今もACSのゆるがない基盤です。私たちは、彼らの人間としての権利とその強化、障害よりはできること、慈善よりは尊厳を実践に生かしています。マレーシアでは、この基本的な信念が欠如しています。マレーシアの多民族社会のスローガン「サトール・マレーシア」が言葉だけではなく社会に浸透するために、民族、宗教、言語、貧富、障害の有無に関わらず全国民を対象とする社会になるよう主張し続けるつもりです。そして、ACSの理事、職員、ボランティア一同、Asia Community Serviceのビジョン・ミッションが変わることなく、今後引き継がれることに最善をつくすことを誓います。

ペナンACSのサポーターより



Terri Faust
(ペナン在住)



私がまだティーンエイジャーだった頃、神様から他人を助けることがいかに重要なことが教わりました。そして、私は、従順に誠実に役割を果たそうと決心し、マレーシアに来ました。

私がマレーシアに来た頃、外国人が滞在ビザを取得することは非常に困難でした。マレーシアの入国管理官は、アメリカ人を好まないと言いつつ1年間待ち続け、10年間有効なビザをやっと取得することができたことを思い出します。あれから30年以上も過ぎ、今なおマレーシアに滞在しております。

マレーシアは、多民族複合国家であるために、人種や宗教の違いによって、それぞれに偏った考え方や異なる言語があり、多くの可能性を秘め、魅力的である反面、多民族共存という複雑な政治システムから民族の違いの中にあまりにも不公平に思えることがあり、時に不満さえ覚えました。このように思うってしまう私なのに、こんなに長く私をこの国に留まらせたものは、間違いなく神様の示す道だったと思います。

今、私はマレーシアの民族、そして文化を愛するようになりました。しかも私がマレーシアに留まって、障害を持つ子どものための仕事をするために、米国をはじめ世界各地の友人が祈りと共にいることはとても嬉しいことです。このことが長年、私にこの仕事を続ける力を与えてくれる要因ともなっています。

信者である私から見たペナンでの健と和代の日常にしばしば感じてきたことを述べます。「献身」ということなのですが、多くの犠牲を払いつつ、常に他者を第一とし、その

ことを決して犠牲とは思っていないような生き方を見せてくれる健と和代でした。私も常にそうしたいと思ってきました。また、ACSを長年支援し、訪問して下さる日本の方たちからの深いお気持ちにも献身を感じるのです。他にも私が学んだことは、世間のこれまでの常識とは「異なる見解」です。健と和代は、障害のある人をない人と同じに近づけようとするのではなく、まず、その人の可能性を探しました。今、私自身も異なるニーズを持つ人をいかに受容するかを考えています。中澤夫妻は、出来ないことや難しいことではなく、その人の出来ることを最大限のばすことに焦点を置きました。私たちはこれからも障害を持つ人たちにとって何が最良であるかをみんなで考えて行きたいと思えます。

最後に「開拓」精神です。20年前にペナンで始まった先駆的歩みは私たちを奮起させてきました。最初は「知る人ぞ知る」程度の試みから、チームの挑戦により、事情は変化して、課題は山積みになりました。終わりのない仕事です。今では、ACSの基礎が堅固で安定していることが私たちにとって何よりの達成です。ACSが今後も他の人たちのモデルになることを祈りつつ、

(翻訳：中澤和代)



内海 明美
(サバ在住)

畑を耕すことをはじめて4年が過ぎた。硬い、固い、土が少しずつほぐれてくるまでには時間がかかる。赤土に砂、肥料、糞、腐葉土などを混ぜ、何度もほぐしながら、次第に軟らかな土になる。よく混ぜた養分充分の土は、蒔いた種の成長も速いし収穫も良い。散水はかせない。雨季は雑草の成長も早い。収穫

は全て土次第である。そして忍耐！畑は人の成長と似てるなど感じる。

日本の若者たちが、このサバ州のジャングルに建つCFM (CARING FOR FUTURE) の児童養護施設にワークキャンプでやってくる。施設内の敷地に、池を掘ったり、道を整備したり、枯れ木の伐採などなど、体力と気力を必要とする約12日間に挑戦する。参加者は、男性より女性が圧倒的に多い、女性は、体力、気力十分で、頼もしいハンサムガールズである。日本からマレーシアにボランティア活動として参加する彼らの目的は何なのだろうか？世界を見たい。誰かのため何かしたい。おもしろそうだから。探しているものが見つかるかも？炎天下、一輪車をひきながら坂道を上り下りする若者の姿を見ながら、励まされる私たち。ひたむきに力をつくすこと、誰が教えるのでもなく、身体で覚えていく。一歩、一歩。日本の未来はこのような若者にかかっている。

中澤健先生が、まもなく日本に帰国されると聞いています。マレーシアのペナン州とサラワク州で知的障害児者の未来のために、彼の後半生は、実践をベースにした活動を主にしていました。それは、土作りのようだったかなと考えます。ペナンで耕した土に、種を撒かれた先生は、現地のアイナさんに後を託されました。その実が今、大きく成長しています。サラワク州でも同じです。どのような実が成長するのか！中澤先生、楽しみでしょう？それらの成長を観察するためにまだまだゆっくりはできません。中澤先生がサラワクのシブにいらっしやることで、私たちが困難に直面したとき指標とするものがありました。

中澤先生が帰国されても、私たちは、一人ひとりがその指標に挑戦することになります。難しい道です。出来れば避けたいな一と思うこともあります。しかし、中澤学校の生徒としては、勇気を出して、踏ん張ります。中澤先生、本当にご苦労様でした。そして長生きしてください。



Muhhibahセンターに関する展望、使命、将来戦略

Dr. Joseph Jawa Kendawang (翻訳・文責: 中澤 健&和代)



Dr. Joseph Jawa
Kendawang

Rajang Central Zone Community Service Association (RCS) は、2006年9月にクチンの登録局 (RCS) に登録されました。日本人の中澤健さんがチェアマンになり、妻の和代さんが支えました。RCSは2006年から2007年にかけて地元カノウイトのパワン地区の人々のニーズに応えるため土地造成し、施設を建設しました。そして、「Pusat Muhhibah」と名付けました。地域の障害のある人たちのためのデイセンターです。2008年1月の開設です。地元の9か所のロングハウスでの調査をもとにして利用者を決めました。開所当時の障害をもつ利用者はわずかに5人でした。それが2016年末現在では、知的及び身体の障害をもつ人たちは、26人に増加しています。

同センターは2008年1月28日から運営を始めましたが、正式な開所式は9月27日に行いました。開所式には地元の人々、及び、当時のサラワク州国土開発大臣、現在は副首席大臣のYB Tan Sri Datuk

Amar Dr. James Jenut Masing博士の出席を得ました。

Pusat Muhhibahのビジョンは、カノウイト地区の福祉ニーズを持つ人たちに役立つ優れたセンターになることです。私たちの使命は、特別なニーズを持つ人々に笑顔で暮らせるためのスキルや仲間を得ること、及び専門的なケアを提供することです。

中澤さんは、2017年3月にRCSのChairman(理事長)を辞任する意思を表明したので、私が後を引き継ぐ決心をしました。これは2017年3月に開かれるRCSの年次総会 (AGM) で決定し、RCS(登録局)に届けます。私がRCSの理事長に任命されたとして、私はアジア地域福祉と交流の会 (ACE) の新理事長である田島光浩氏と緊密に連携し合うことを楽しみにしています。

Muhhibahセンターを運営するために新しい戦略的計画と行動計画を策定し、その資金を調達しなければなりません。何故なら、中央政府からの財政援助に完全に頼ることができないためです。そのため州福祉局に要請を続けるとともに地元の企業や個人に支援・協力をお願いしたいと思っています。

(センターでは、利用者が作業して製品を作っていますが、これは全額

利用者に還元され、センターの運営費になることはありません。)

センターのスタッフの教育スキルを向上させるために、一部のスタッフを地元または日本への研修に送りたいと思っています。ACEが日本のスタッフ研修プログラムへの手配について協力いただけたらと願っています。

この機会に、2006年のMuhhibah建設スタート以来、2008年の開設その後のセンター運営に多大な貢献をしてくれた中澤健・和代夫妻に心から感謝の意を伝えたいと思います。また、継続して応援してくださっている日本のACEの皆さんに感謝しています。さらに、サラワクの住民の方々、また、サラワク州政府・福祉局の財政支援についても感謝します。

私だけではなく、Muhhibahセンターのスタッフ全員が、ACEの新理事長である田島光浩博士と、サラワクの私たちを訪問してくださった日本のACEメンバー全員に感謝しています。

みな様、本当にありがとうございます。どうぞ今後もよろしく願いいたします。最後に新しい年が皆様の幸せと今後の繁栄を約束されるようお祈りしています。

Thank you very much!



中澤 健

次期Chairmanに予定されているジョセフさんと初めに会ったのは2003年7月、仲介者は前号で日本人墓地について書いて下さった酒井和枝さん、彼女に引き合わせてくれたのが江川恵(現在大塚)さん、彼女を紹介してくれたのは、ベナンの初期からお世話になった古岡貴文さん。今号2頁のベナンのアイナさんとは、故丸山一郎さん(元専門官、元全社協障害福祉部長)が引き合わせてくれました。出会いの積み重なりが人生だと言いますが、アイナさんが書いたように(2頁)、神様のご計画に違いないと思っています。とても偶然の重なりとは思えません。ジョセフさんとの出会いは、半年後にはパワンという地域と「ムヒバ」の現在に繋がったし、その後の「ムヒバ」の利用者やスタッフも「Dari Kuching」の読者の皆さんと出会えたのも、単に偶然ではないのだと、ご縁があつてのことなのだと思います。これまでの皆さまのご協力に感謝しながら、今後のご協力についても、是非よろしく願いいたします。

ジョセフさんは10年前、「RCS」登録事務を殆どして下さいました。当時サラワク州森林局次長だった彼は、オフィスの総力で書類づくりから何から何まで、つまり登録局 (RCS)にも同行し、RCSという団体名も彼と一緒に考えたものです。上の文章で彼は「カノウイトのモデル」と、控えめに書いていますが、「ムヒバ」には、サラワク州のみならず、マレーシアのモデルになってほしいと思っています。奥地や過疎の地も多いマレーシアには、福祉ニーズを重複して持つ人たちが大勢います。マレーシアの人たちの手で、彼らの存在が認知されて、その元気で優しい暮らしが、とすれば先進国に追いつくことばかり目的になりがちな人たちの足を止め、何処に向かうかを考えるモデルになればと期待しています。

ACSはいま khor Ai-Na

アートを楽しむACS・ステッピングストーンのメンバーたち



ノラミ作(動物のマスク)



tutti arts australiaのアーティストと共に



メンバーと一緒に働く章吾くん

Dari Kuching 36号でご紹介したアーティスト・イン・レジデンス (AiR) プログラムを開始して以来2016年は、ACSベナンではかなり芸術的な年でした。

6月には、最初の居住者である大阪の尾越章吾さんを迎えました。

章吾さんは、すでに9ヶ月間を私どもと一緒に滞在しており、Stepping Stone Centerのメンバー全員ととても仲良く仕事をしています。

また、ベナンに数週間滞在していたTutti Arts Adelaideのビジュアルパフォーマンス・アートチームと協力する機会もありました。そして、私たちは8月にジョージタウンフェスティバルで共同アートプロジェクトを立ち上げることができました。

社会の変化をもたらすことを目指すこのコミュニティ・アート・プロジェクトに参加することは、ACSにとってもメンバー全員にとっても、すばらしい経験でした。

(翻訳: 文責 中澤和代)



RCSはいま 中澤 健

☆☆☆Muhhibahのクリスマス☆☆☆

赤道直下、常夏の「ムヒバ」にもクリスマスはやってくる。今年(2016)は12月23日だった。

クリスマスツリーだけれど、日本の七夕のように願いを書いて吊してある。壊れていた音響設備の修理も間に合い、今はなき「Phironina」の遺影を飾った。マレーシアの国歌と「ムヒバ」ソングを歌い、ケーキを切った。みんなが赤い三角帽子をかぶり、何とも言えない賑やかさ。大笑いしたりはしゃぐばかりではない。涙を流している人も。司会のJenny (スタッフ) の声も詰まり、見ると目に涙。どうしたの?と問うと「分からない。嬉しい!」という。

今年もサンタクロースは私だった。赤い服に赤い帽子、白い大きな口ひげ。大きな袋をかついで、おっと鈴を持つのを忘れたと思ったら、和代が追いかけ持ってきてくれた。リン、リン、リン。や

んやの喝采の中、赤い布をかぶったテーブルにプレゼントをどきりと置く。歓声を聞きながら私の胸も、最後の「ムヒバ」のクリスマスと思うとキュンとなる。

ケーキにナイフを入れ、口の周りをクリームだらけにして、みんな嬉しそう。自分で食べられないウイルソンに年齢は3歳違いの優しいグリーが、スプーンで口に運んでいた。外では、男性職員が火を焚いて、チキンのBBQ。日本のクリスマスでは余り見ない光景かも知れないが、BBQはみな大好き。

涙、笑い、優しさに溢れたクリスマスだった。去年と違って、宗教色が全くないクリスマス。2000余年前、人々に愛を説いたイエス様のお誕生のお祝い。こんな形で素材に楽しむクリスマスが出来ることは幸せだ。祝えない人たちも多い世界の情勢を、イエス様はどう見てられるのだろうか。



クリスマスを楽しむみんな



下-Phironinaの遺影と共に



じやらんじやらん ちやり がわん♪(38回)

ハイビスカス 上杉 誠



おしとやかな仏僧華

マレーシアの国の花を知っていますか？南の国マレーシアを象徴する国の花はマレー語で「ブンガ・ラヤ」＝「偉大なる花」と呼ばれる赤いハイビスカスです。

ハイビスカスのその真っ赤な花は濃い緑と真っ青な空に映えて、いかにも南の島にふさわしい花とも言えるでしょう。赤は勇気と生命、そして急激な発展を表しています。五枚の花弁はマレーシア建国時の国是である「神への信仰」「国王、国家への忠誠」「憲法の尊守」「法による統治」「良識ある行動と徳性」の五つの理念を表すものとされ、マレーシア初代首相となるトゥング・アブドゥール・ラーマンにより指定されたものです。

そして、何故にハイビスカスが選ばれたのか。それは南国マレーシアではいつでも美しく咲いていて、何時でもどこでも見ることが出来るという親しみを込めた理由だったそうです。

そのハイビスカス、赤白黄色オ

レンジにピンクと様々な色がありますが、東南アジア原産種のブッソウゲ系とフウリンブッソウゲ、ハワイ原産のハワイアン系の大きく三種に分かれています。いずれも園芸品種として広く出回っているため、ボルネオでも至る所で見ることが出来ます。下を向いておしとやかに咲くのがアジアビューティー。太陽を向いて凛と咲くのがハワイアンの美人さんです。

このハイビスカス、花を愛でるのは見るだけが能じゃありません。なんと口にすることも出来るのです。ハイビスカスティーと言うのを聞いたことがあるかもしれませんが、これは同じくハイビスカスの仲間のロゼルと言う品種の萼の部分乾燥させたもので、健康に良い自然のお茶として世界各地で親しまれています。なんでもクレオパトラの美しさの秘訣もハイビスカスティーだったとか。

そして、普通に咲いているハイビスカスの花もジュースとして飲むことが出来ます。僕が試したの

はブッソウゲの赤い花ですが、30個ほど集めたものを1リットルくらいのお湯で煮出すこと数分。ピンクの煮汁が出たところに砂糖とレモン汁を少々入れると色も鮮やかな真っ赤なジュースに変わります。花にはビタミンが豊富でポリフェノールやクエン酸、アントシアニンといった抗酸化作用のある成分が多く含まれ、鉄分やカリウムも多く含まれるとされていますので、このジュースはさわやかな酸味のある健康飲料なのです。

ボルネオにお越しの際には庭に咲くハイビスカスを集めてジュースを作ってみませんか？その味はきっと南の国の思い出になることでしょう。眺めて良し、味わって良しのハイビスカス、観光と食の国マレーシアの国花に相応しい素敵な花です。 Jalan Jalan cari kuan 12 マレー語で良縁を探しに行こうの意味です。

公益財団法人 日本社会福祉弘済会に感謝！

これまで広報紙として“Dari Pinang”その後“Dari Kuching”の発行が続けられましたのは、公益財団法人日本社会福祉弘済会の助成金のお陰です。

思い起こせば、1996年9月、現在の理事長、当時理事の寺田亮一氏、当時常務理事であった恒屋光行氏、当時事務局長の高津一義氏がペナンに生まれ、助成金をご贈呈下さり、それから今日まで、単にお金だけでなく心の籠もった応援を続けて下さいました。当初は瀧美節夫理事長でしたが、その後金田一郎氏に替わられました。金田先生もマレーシアに生まれその後何度も激励のお手紙を下されました。

ペナンからの“Dari Pinang”が24号、その後私はボルネオ島に移り、やがて“Dari Kuching”として今号39号まで発行することが出来ました。私が半年後には帰国を予定しておりますので、平成28年度をもちましてマレーシアの現地からの広報紙発行発送事業は終了させていただきます。重ねて心からこれまでのご支援とご協力に感謝申し上げます。

編集後記

- ・2017年を迎えました。長い間、ご愛読いただきましてありがとうございました。これまでの約13年間、年3回とはいえ、3か月はあっという間に過ぎ、多くの方々のご協力を得て、マレーシアでのあれこれをお伝えしてまいりました。毎号、楽しみながら編集をさせていただき、貴重な体験でした。残念な気もしますが、何にでも永遠は望めないのが現実。Dari Kuchingが少しでも皆様のご記憶に残れば幸せに存じます。(Kenzo)
- ・始めたことには終わりが来るのですね。ボルネオの活動を日本人にでなく、ボルネオの人々に託して、今後は後方支援とすることに決めたため、現地からの広報紙は終刊です。感慨深いです。全39号に毎回魅力的な文章と写真を欠かさず寄せて下さった上杉誠さん、毎回のあれこれ注文に応じて下さった印刷屋さん、有り難うございました。会員の皆さまには今後の私の周辺を何らかの形でご報告したいと思っています。どうぞ何時までもお元気で。(Ken)